

---

# やり直し

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
やり直し

【Nコード】  
N1886F

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
漫画を描いていて失敗。けれど実は気付かないうちに何度も。デジャヴューからヒントを得ました。

## 第一章

やり直し

「しまったなあ」

谷田元義はやってしまつてからこの言葉を出したのだつた。

今彼は漫画を描いている。職業は漫画家だ。だが今描いているページの上にベタ用の墨をこぼしてしまつたのである。だからぼやいたのだ。

「こりゃもう駄目だな。描きなおしか」

そう思いまたぼやく。

「締め切りも近いのに。困つたことだ」

ぼやくことしきりだつた。いい加減眠くなつてきていたので早いうちに終わらせて寝たかつたのだ。だがそこでこのミスだ。ぼやかすにはいられないというわけだ。

しかし起こつてしまったことはどうしようもない。ぼやいても墨が元に戻り原稿が奇麗になるわけではない。それはわかっているがそれでも言わずにはいられなかつたのだ。

「元に戻れ」

思わずこう呟いた。呟いたのは無意識のうちで考えてのことではない。言つても無駄なのはわかっているし何にもならないのは頭ではわかっていた。だが呟かすにはいられなかつたのだ。

そして呟くと。不意に周りが回つてしまつた。そして彼は今原稿を描いているのだつた。

「先生」

元義にアシスタントの一人が声をかけてきた。

「このページ御願ひします」

「ベタはできたよな」

「はい」

アシスタントは元義にんえつつそのページを彼のところに持つて

来たのである。

「今終わりました」

「そうか。じゃあ次はトーンだな」

「御願いできますか？」

「できるよ。じゃあ早速」

「はい、どうぞ」

アシスタントはそのトーンまで持って来た。彼はそれを受け取って早速トーンを削って切って貼った。ところが貼ってから始めて気付いたのだった。

「あっ、ここじゃなかったや」

貼って舌打ちするのだった。そこは違うトーンでありしかもトーンの削りを間違えてしまったのである。これは致命的なミスであった。

「くそつ、剥がれないぞ」

剥がそうとしても剥がれないのだった。糊が乾いて手遅れになっていた。

「失敗かよ。もうすぐ締め切りなのに」

舌打ちせざるにはいられなかった。あまり寝ていないから当然である。

彼は眠くて眠くて仕方ない。それで歯噛みしつつまた言った。

「時間が戻ればな」

また言うのであった。ただし彼は気付いてはいない。

「やり直せればな。この原稿」

こう言ったところで周りが回った。気付くと彼は今からトーンを貼るところであった。

「よし」

「あっ、先生」

ここでアシスタントが彼に声をかけてきたのだった。

「そのトーン違いますよ」

「おっと、そうか」

「はい。こっちのトーンですね」

言いながら手元にあるトーンを指し示してきたのであった。

「こっちのトーンを使われるべきかと」

「危ない危ない。それじゃあ」

「さっきのトーンはこのページには使わないですね」

「ああ、そうだな」

原稿をよく見ればその通りだった。貼る場所に番号を指摘しているがそこに書かれている番号は最初のトーンではなかったのである。

「じゃあ一旦退けておいて」

「そっちをですね」

「うん。これでよし」

アシスタントの話聞きながらトーンを貼るのだった。今回は無事進んだ。

そのうえで次の作業に移る。ベタもトーンも終わり次の仕事だった。

「線入れるか」

「インクですね」

「ああ、次はそれだな」

頷いて今度はペンを手にするのだった。Gペンにインクをつける。

## 第二章

その時だった。インク壺が倒れた。中のインクが派手に原稿の上  
にぶちまけられてしまったのだ。どう見ても原稿はこれ以上描く  
は無理だった。

「しまった、やっちゃまった」

「先生、それはもう」

「ああ、駄目だな」

うんざりした顔でアシスタントに応えた。応えながら側に置かれ  
ていたコーヒーカップを取りそこにあるコーヒーを口に含む。言う  
までもなく眠気覚ました。

「描きなおしか。参ったな」

「じゃあそのページまた描いてですね」

「下書きからか」

うんざりとした顔はそのままだった。

「参ったなんてものじゃないぞ、俺の失敗だけれどな」

元義は舌打ちをここでまたした。何度目かだが彼はそのことを知  
らないのだった。

「やり直せればな、全く」

「はい、そうですね」

アシスタントが頷くとまたしても周りが回った。気付くと今彼は  
Gペンをインク壺に入れようとしているその時だった。ここで彼は  
ふと気付いたのだった。

「おっと」

ペンは右手に持っている。左手は空いていたのだ。それでそこで  
その左手でインク壺を持った。倒れないように安定させたのである。  
そのうえでインク壺にペンを入れてそれから線を入れる。最後ま  
で無事線を入れることができた。これでペン入れも終わったのだっ  
た。

「これでペンも終わったな」

「後は消しゴムですね」

「さて、消しゴムはだ」

アシスタントに応えながら自分の机の上を見回す。消しゴムはあるにはあったがそれはやけに小さくなってしまったものだった。

「これを使うか」

「大きいありますよ」

ここでアシスタントは自分の消しゴムを差し出してきた。白い普通のプラスチック消しゴムだ。

「これ、どうですか？」

「そうだな。じゃあそれを使わせてもらうか」

こう言ってその消しゴムを受け取って早速使いだした。ところがだ。

消しゴムが紙に引っ掛かった。しまったと思った時にはもう遅かったのだった。

「うわ……」

「ああ、先生……」

アシスタントの声も泣きそうになっていた。

「やっちゃいましたね」

「やっちゃったなんてものじゃないぞ」

見れば紙が見事に破れていた。消しゴムに引っ掛かってそのままいつてしまったのだ。これでこの原稿はおしまいであった。

「これはもう……な」

「描きなおしですね」

「どうしたものかな」

苦々しい顔で机の上で顎に手を当てていた。

「これは」

「どうしましろう」

「時間よ戻れ」

冗談めかして言った言葉だった。

「って言ってもどうにもならないよな」

「残念ですね」

アシスタントが苦笑いを浮かべる。どうしようもないことは彼にもわかっていた。ところがまたしてもここで周りが回って。元義は消しゴムをアシスタントから受け取るうとしていたのだった。

「じゃあ先生」

「有り難う」

その消しゴムを使おうと思ったのだった。

だがここで急に気が変わったのだった。自分の小さな消しゴムに目があったのだ。それであらためて彼に対して告げたのである。

「いや、待ってくれ」

「どうしました？」

「まだ少し残っているからね」

彼は自分の消しゴムを手に取ったのだった。今自分の机の上にある消しゴムをだ。

「これを使うよ」

「それをですか」

「ものを粗末にはいけないからね」

実はものは大切にしようという考えが結構ある元義だった。アシスタント時代に貧乏で何かと苦労してきた経験もそこにはあるのだが。

「だから。ここはこの小さいのを使うさ」

「そうですか。それじゃあ」

アシスタントはそれを受けて今は引っ込むのだった。

「そういうことで」

「これで終わりだったかな」

彼はふとここで言った。

「終わりって？」

「いや、消しゴムかけてこのページは終わりだったよな」

彼が言うのはこのことであった。漫画のことだったのだ。

「確か」

「確かそうでしたね」

アシスタントも今の彼の言葉に頷いて答えた。

「まだページはありますけれど」

「ページはいつもと変わらないよな」

ふと首を捻ってきた。

「今週も」

「そうですね、いつもと同じページ数ですけど」

「それにしても疲れるな」

時間が何度も戻っていることに気付いていないのだった。

「何でだ？特にこのページなんか」

「そのページがどうかしましたか？」

「何度もやり直している気がするな」

首を捻りつつそのページに消しゴムをかけていた。

「どういうわけかな」

「気のせいじゃないですかね」

アシスタントは特に考えることなくこう彼に答えた。

「それは」

「そうかな、やっぱり」

「時間は戻れませんよ」

少なくとも彼等はこう思っていた。普通はそうだからだ。

### 第三章

「そんなこと有り得ないじゃないですか」

「それもそうか」

元義は常識の範囲内で考えて答えていた。

「有り得ないよな」

「そうですね。消しゴム終わりましたね」

「ああ」

話をしている間も手は進めていた。消しゴムはもうかけ終えていたのだ。

「じゃあ次のページですけどね」

「それが」

「もう終わらせておきました」

気の利くアシスタントだった。

「消しゴムまで全部」

「おい、随分と早いな」

「何かね。進んだんですよ」

何故そこまで進んだのか彼にもわからないようだった。少しきよとんとした顔になっているのがその証拠だった。時間がそれだけあつたということに。

「自分でも信じられない程に」

「そうか。まあとりあえずそのページは終わったんだな」

「はい」

その問いにくくりと頷いて答える。

「あともう少しですし。頑張っていきましょう」

「そうだな。あと少しだ」

その言葉にお互いで頷き合う。

「慎重に行こうか」

「慎重にですか」

「何かな」

またここで首を捻る元義だった。

「何度も間違えた気がしているしな」

「あれっ、今回は先生これといったミスしていないですよ」

アシスタントが覚えている限りではそうだった。

「それでまたどうして」

「あれっ、そうか」

彼もまた気付いていなかったのだった。

「そういえばそうか。何か何度もえらいミスしてる気がするんだだけどな」

「何かおかしいですね」

「何故だ。やっぱりこのページだ」

今まであれこれしていたそのページをまた指差す。

「無性に憎らしくもあるしな」

「憎らしいってまたそんな」

「どうしてか自分でもわからないけれど無性に」

そういうことであった。自分でもどうしてかはわからないが。

「腹立たしくくてな」

「はあ」

「まあいいか」

とりあえずもうこれでいいとした元義だった。

「それは。とりあえず原稿終わらせるか」

「ええ、本当にもう少しですしね」

アシスタントもこれには異論がなかったのだった。漫画家の仕事は漫画を描いてそれを終わらせることだ。二人もそれははっきりとわかっていた。

「徹夜せずにいけそうですし。それじゃあ」

「よしっ、やるぞ」

「はいっ」

こうして二人は仕事のクライマックスに入った。だが元義はこの

時知らなかった。原稿を送る段階になって今度はあれこれと紛失したり送り間違えたりしてその度に何度も時間が元に戻ってやり直していることを。それは彼にはわかる由はないことだった。人である彼には。

やり直し 完

2008・8・14

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1886f/>

---

やり直し

2010年10月8日15時21分発行